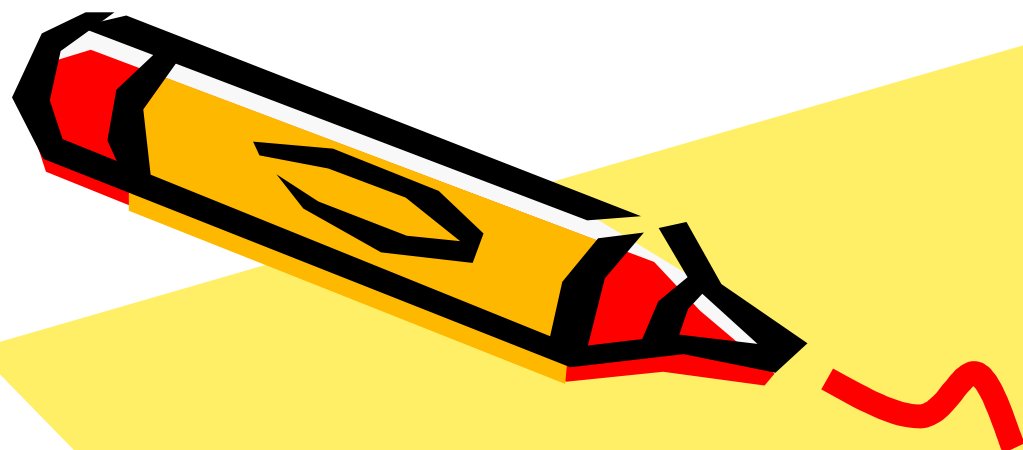




「特別支援教室構想」に 関する研究の取組

長野県長野市立川中島小学校



川中島小学校の紹介

- (1) 在籍者数 421名
- (2) 学級数 15学級
- (3) 特別支援学級(知障3名、情障3名)
- (4) 言語障害通級指導教室
- (5) 学習障害等通級指導教室(H19年より)
- (6) 特別支援教育支援員 1名 等



交流及び共同学習の様子

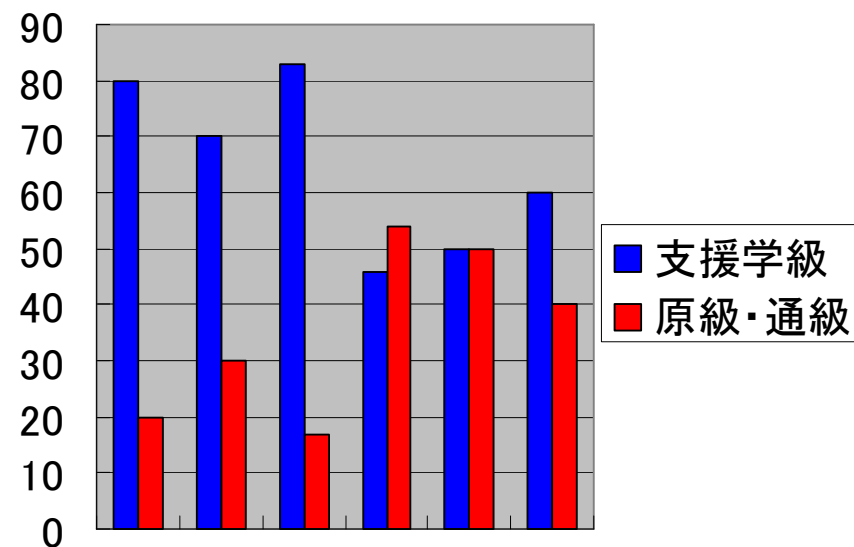


(1) 交流及び共同学習の状況と課題

交流及び共同学習の
実態

(%)

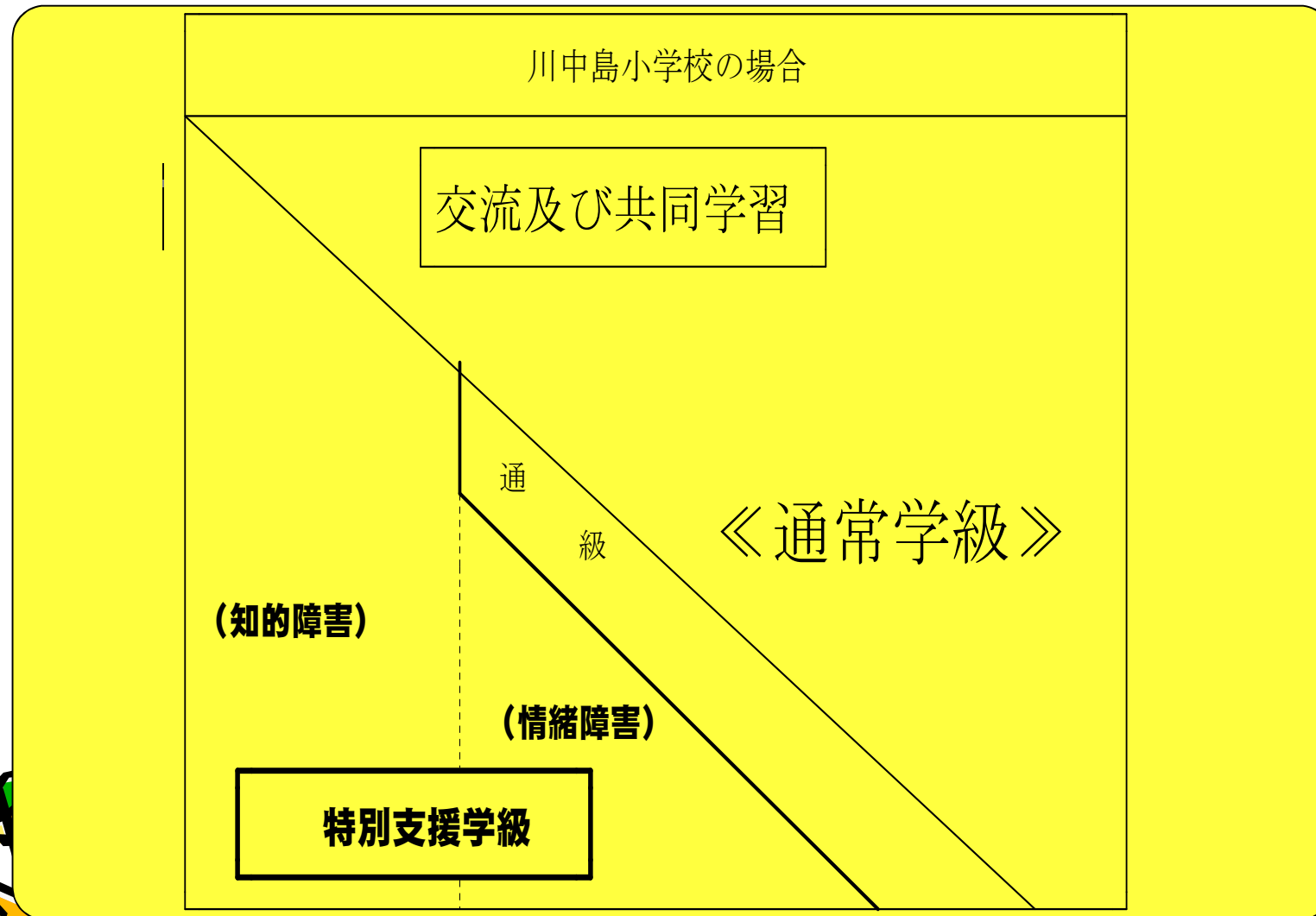
	支援学級	原学級・通級
T児(知2年)	80	20
S児(知5年)	70	30
U児(知6年)	83	17
R児(情1年)	46	54
K児(情2年)	50	50
N児(情5年)	60	40



T児(知2年)
S児(知5年)
U児(知6年)
R児(情1年)
K児(情2年)
N児(情5年)



「特別支援学級」と「通級指導教室」と「通常学級」の関係





交流及び共同学習 個別の指導計画 (短期) 1 2 月 むぎのほ学級 6 年 1 組 氏名 T・Y

教育 課題	① 色々な活動や学習に自分から取り組むことができるようになる。 ② 原学級での活動に前向きに参加し、楽しく活動することができる。
----------	---

	特別支援学級	交流及び共同学習		家 庭
		原級	専科・教科担任	
目 標	○あゆみ・むぎのほ展に 向けた色々な活動に自 分から進んで取り組 む。 (以下省略)	○あゆみ・むぎのほ展に向け た共同学習において、前向 きに参加できる。 (以下省略)	○トーンチャイムを使って 簡単な演奏を楽しむ。 (以下省略)	○学校への持ち物の準備を自分から進んで 行う。(以下省略)
支 援 の 方 向	・販売品の製作では、のこ ぎりやヤスリを使って、 好きなものを作るように する。 (以下省略)	・担任が本児の良さを具体的な 姿から見つけてほめる。 (以下省略)	・覚えやすい曲を選び、できる 喜び、できた喜びを味わう。 (以下省略)	・特別に必要なものがあれば下校時に本児に伝 えたり、家庭へ忘れずに連絡をしたりする。 (以下省略)
評 価				



＊資料 1

交流及び共同学習 個別の指導計画（短期）

学級 年 組 氏名

教育課題

	特別支援学級	原級	通級	専科等	家庭
目 標	＊個々のねらいは何か。				
支 援 の 方 向	＊ねらいを達成するための支援の手だては何か				
評 価	＊次への課題は何か				

(2)「特別支援学級」への担任以外を含めた 共同的な指導の取組の状況と課題

音楽専科との合同学習の様子



サブTT

音楽専科

情障担任は
取り出し・入り込み支援



(3)「特別支援学級」と「通級による指導」の弾力的運用

＜支援の形態・内容・支援時間を決め出す手順＞

- ・第1次精査(状況別:発達障害、不適応傾向等)
- ・第2次精査(カテゴリー別:読み、書き、算数
不注意、衝動性、多動性等)



- ・児童の様子(学習面、行動面、情緒面、長所等)
- ・実態から課題、背景、支援の方針等



- ・個別の指導計画(観点、目標、手だて、形態等)
- ・実践(支援評価カード:支援項目、手だて、評価)



カテゴリー別チェックから

このチェックリストは、児童の困難を特定し、支援ニーズや支援方法を明らかにするもの

1 当てはまらない 2 やや当てはまる 3 当てはまる

カテゴリー	チェック項目	評価
読み	①音読がいつもたどたどしく、、、	①
書き	②文字の形がうまく書けず、、、	③
算数	③数量関係や図形の概念等、、、	②

(資料 参照)



児童の様子を詳細に把握

- ・ 学習面（読み・書き・学力等）
- ・ 対人関係（友だちや大人との関係、協調性）
- ・ 行動面、情緒面（集団行動、こだわり行動等）
- ・ 運動面、作業面
- ・ 児童の興味関心、いいところは何か
- ・ これまでの配慮や援助、効果のあった関わり
- ・ その他（健康面、不適応状態、家庭環境等）



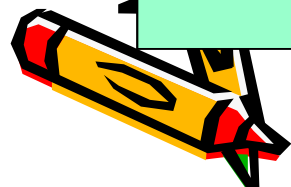
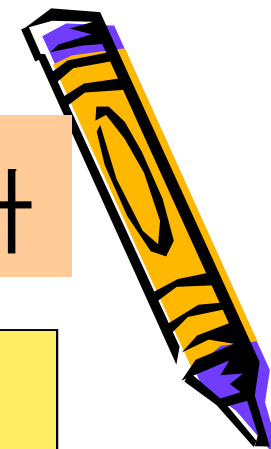
実態把握から背景、課題、支援の方針

①課題

②背景

③支援の方法

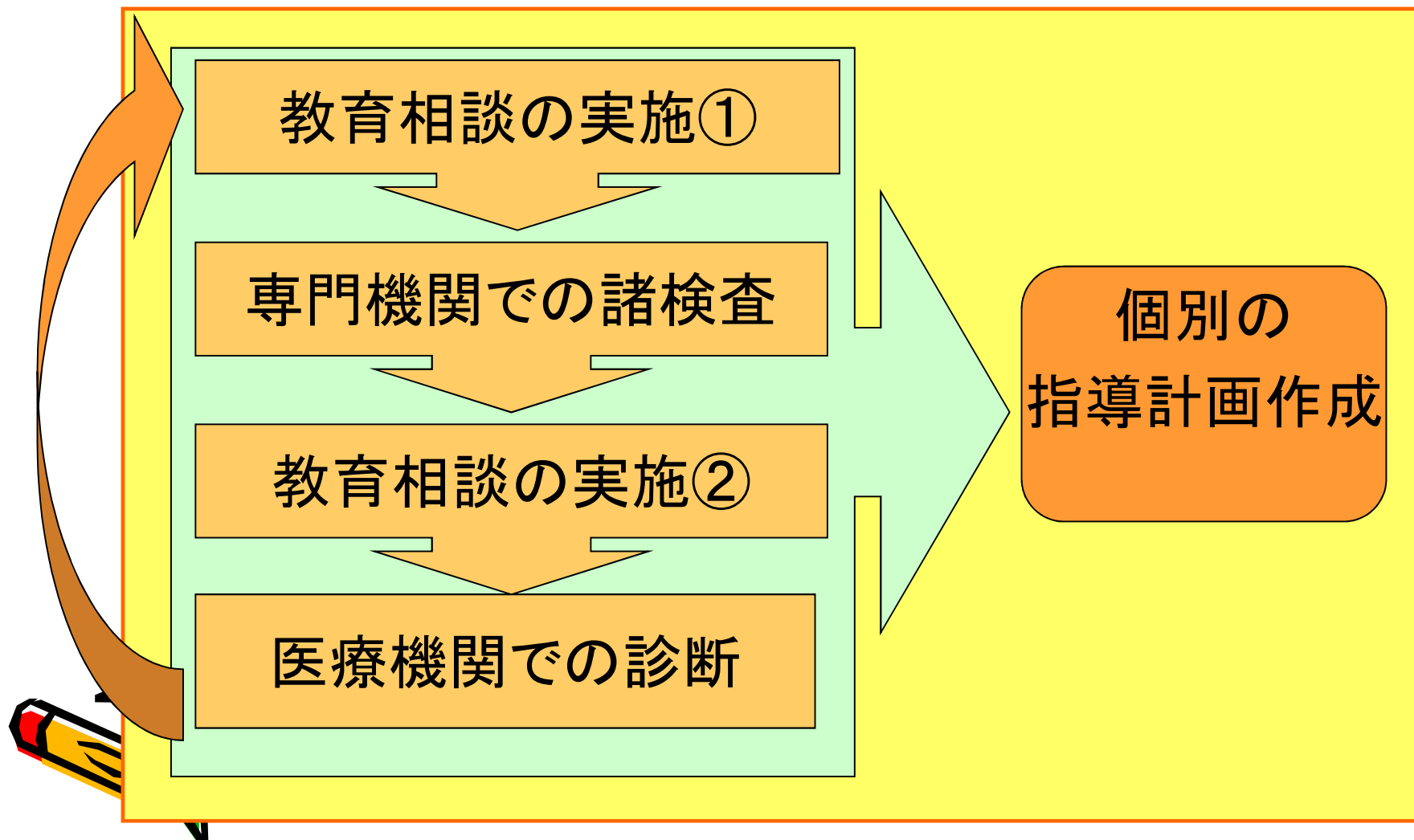
④その他



個別の指導計画(短期)

観点	目標	手立て	形態・評価
① 教科			
② 行動			
③ コミュニ ケーション			
④ 対人 関係等			

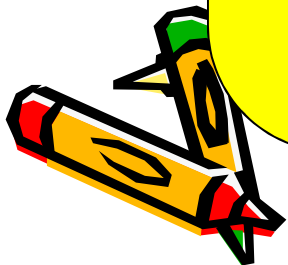
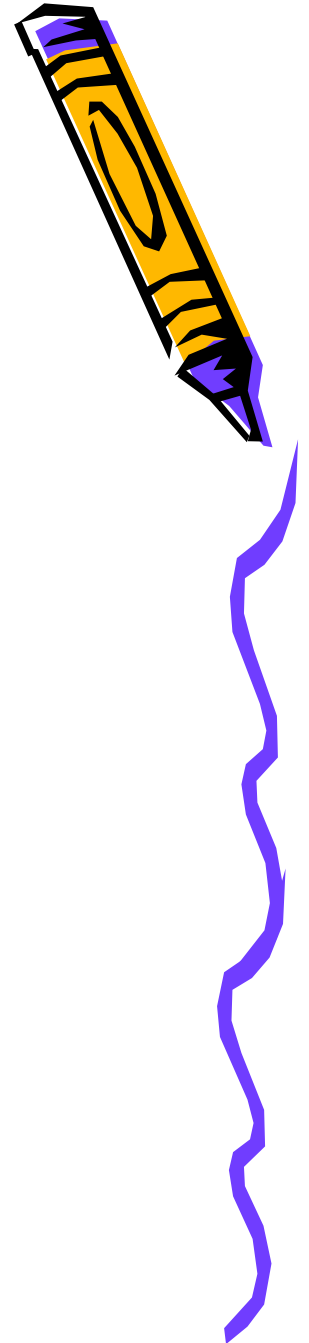
継続した教育相談 専門機関と医療機関との連携



教育相談室



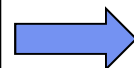
保護者の控室・支援会議の場



(3)「特別支援学級」と「通級による指導」の弾力的運用

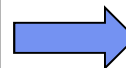
①取り出し支援の場合

読み書きが困難
コミュニケーションが苦手
構音障害等
(週1時間・7名)



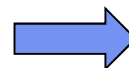
学習障害等通級指導教室
言語障害通級指導教室

知的障害に起因する学習の遅れ
(週5時間・1名)
ADHDの疑いのある児童への作文等
(週2時間・2名)

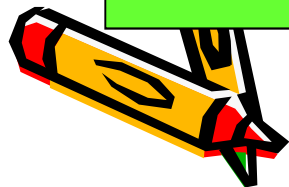


特別支援学級
(情緒障害)

不登校による学習遅滞
(週5時間・1名)



特別支援室
(支援員)



学習障害等通級指導教室



コミュニケーションの場



(3)「特別支援学級」と「通級による指導」の弾力的運用

② 入り込み支援の場合

学習習慣形成担当



基礎学力の低下
(週5時間・6名)

特別支援学級担任
情緒障害



運動発達の遅れに対する補助
(週3時間・1名)

学習障害等通級指導教室担当
言語障害通級指導教室担当



読み書き・算数の困難さ等
(週5時間・4名)

特別支援教育支援員



基礎学力の低下
(週4時間・5名)
リコーダ等楽器演奏
(週2時間・1名)





(4) 特別支援教育支援員等の活用の現状と課題



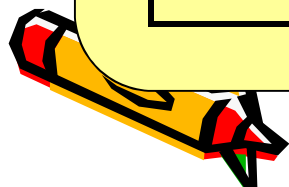
	月	火	水	木	金
1	打合せ会	3年	5年 (取り出し)	4年	3年 《音楽》
2	3年	6年	3年	5年 (取り出し)	5年 (取り出し)
3	4年	3年 《音楽》	6年	6年	6年
4	5年 (取り出し)	5年 (取り出し)	4年	3年	3年



音楽以外は算数 取り出し以外は入り込み

支援者名 ()

月/日	支援項目	手立て	評価
／	*この時間の支援内容を明確にする	*担任と支援者（LD等通級指導教室担当・支援員）で具体的な内容を考える	*次時への手立てを明記する



支援評価カードの活用

* 事例: 5年男子 学習障害の疑い

・文字を正しく書くことや整理整頓が困難

(算数)短期目標: 小数点の位置や位の位置が正しく書ける。

支援項目

位をそろえたり、小数点の位置を気をつけたりして正しく計算する。

手だて

プリントは縦線のみで行う。

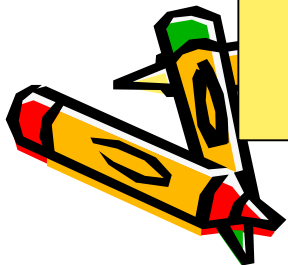
評価

位を間違えることが少なくなる。

プリントの問題数を減らして見やすくする。

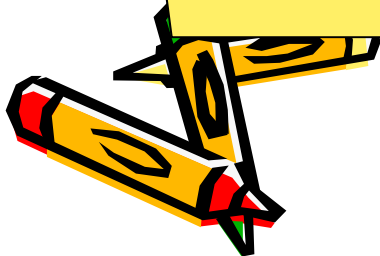
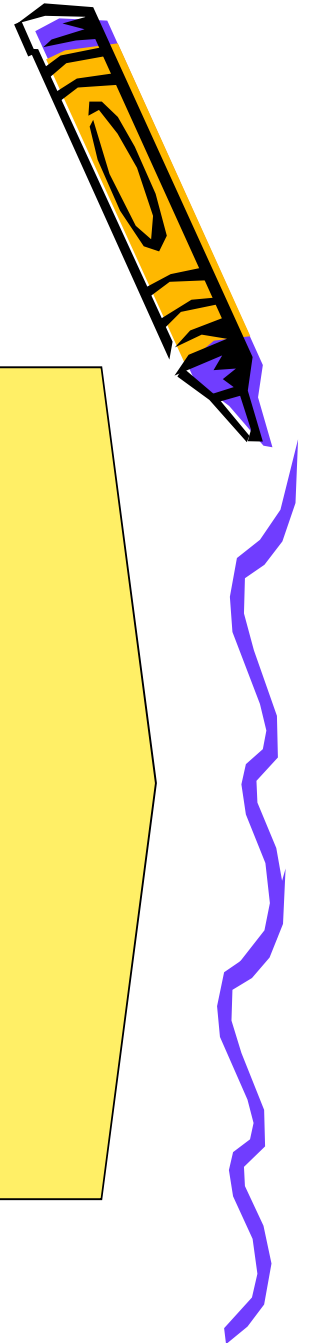
☆弾力的運用による成果

- ・通常学級担任は、支援評価カードを学習障害等通級指導教室担当と共に作成して取り組んだことで、LD等に対する支援のあり方を学び、支援の手だてが分かりやすくなった。また、支援の記録になるので、個別の指導計画作成や評価に活かせる。
- ・支援員との情報交換により児童理解が深まる。
- ・支援員は、支援評価カードを基にミーティングを重ねることで、発達障害や支援の方法を学ぶことができる。



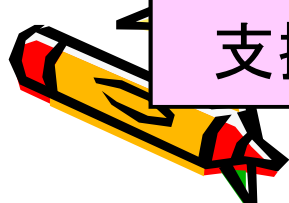
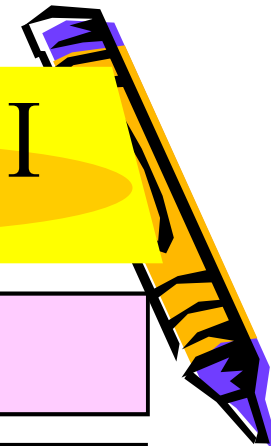
弾力的運用による課題

- ・取り出して指導する場合に児童や保護者に理解を得るための継続した教育相談が必要
- ・言語障害通級指導教室と学習障害等通級指導教室の連携のあり方
- ・ミーティングの時間の確保が支援員の勤務時間等の関係で難しさがある

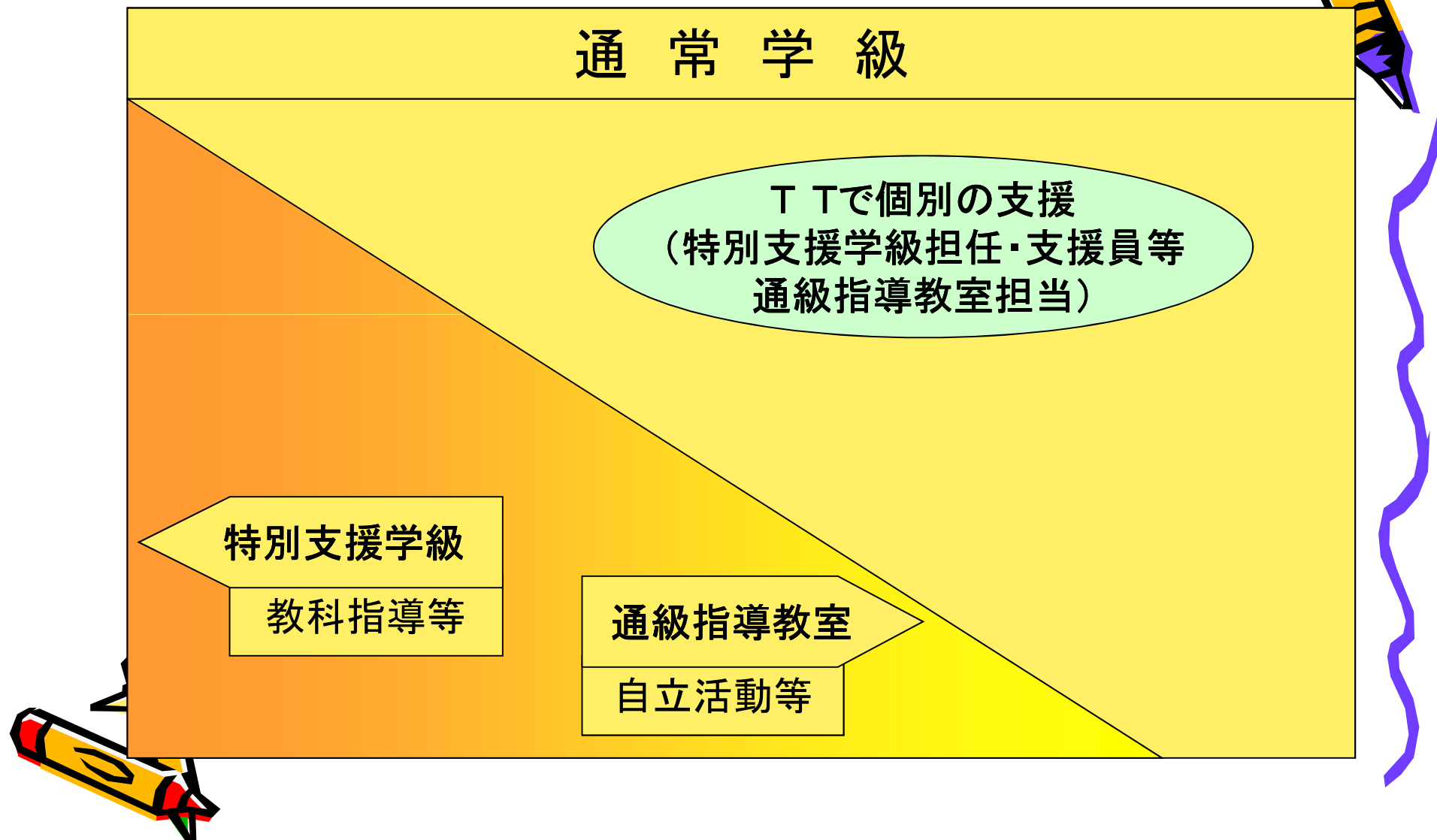


「特別支援教室」に向けての提言 I

- 1 交流及び共同学習は個別の指導計画を作成
- 2 弾力的運用では支援の形態・内容等を決めだしていくためにはアセスメントが大切。
- 3 通常の学級担任の支援力の向上は、支援の必要な児童のアセスメントから個別の指導計画を作成
- 4 支援員の効果的な活用は、支援評価カード等で具体的な支援内容を明らかにして取り組むこと。
- 5 支援員の専門性の確保は支援評価カードを基にして支援に関わる人たちとのミーティング



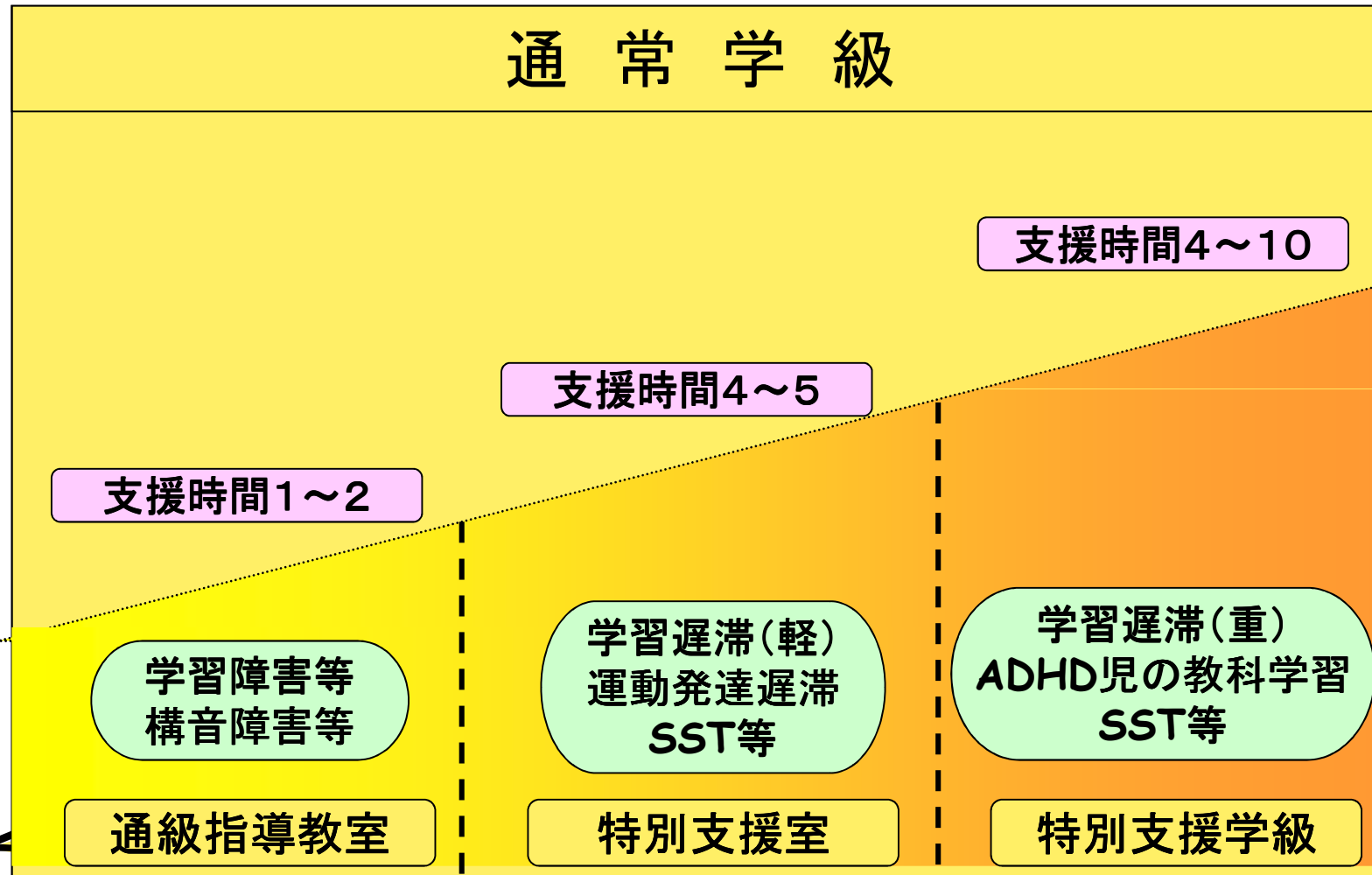
提言Ⅱー1 イメージ図-1
「通級による指導」と「入り込み指導」を行う場合



提言Ⅱー2

イメージ図ー2

「通級による指導」を行う場合



○学 校 名 長野市立川中島小学校
○所 在 地 長野県長野市川中島町上氷鉋 1 7 2
○電話番号 0 2 6 - 2 8 4 - 4 1 0 2

1 学校の概要

(1) 学校周辺地域の特徴

本校は市の中心部から南西に位置し、北に犀川が流れ、その扇状地に発展してきた地域である。近隣には、川中島合戦の古戦場、川柳将軍塚、森将軍塚古墳等の史跡が多い。

学校は明治2年「日新館」として創立され、本年度創立140年目を迎える長野県内で最も古い伝統ある学校である。長野冬季オリンピックを契機に、学校周辺も整備され、近くをバイパスや新幹線が通り、商業地や新興住宅地もつくられ変貌してきた。特産の川中島白桃の栽培も盛んであり、春には白桃の美しいピンク色の花に学校が包まれる。

(2) 在籍者数・学級数

・在籍者数 421名 ・学級数 15学級

(3) 特別支援学級設置数

知的障害 1学級（在籍 3名）

情緒障害 1学級（在籍 3名）

(4) 通級指導教室

言語障害 1教室（13名）

学習障害等 1教室（8名）

(5) 連携を行なっている特別支援学校

盲学校 1校 ろう学校 1校

養護学校3校（知：1 病：1 肢・知：1）

(6) 特別支援教育支援員・補助員等の数

特別支援教育支援員 1名

(7) 学校独自の取り組み等

「福祉教育」として児童が障害のある人々を理解する学習が学年に応じて大切にされている。聴覚に障害のある方や視覚に障害のある方と交流したり、学校近くにある特別養護老人施設や知的障害者施設と交流したりしている。また、教職員研修やPTA

研修等においても、障害のある方や巡回相談員を講師に招いて教養講座として障害を理解するための啓発活動も行われている。

特別支援学級と原学級等の児童と共同で活動する場を設けて活動したり、特別支援学校と居住地校交流で作品を製作したり豆腐づくりを行って会食したりして関わりを深めている。

また、平成19年度から学習障害等の通級指導教室が開設された。現在、近隣の学校からも通級する児童を受けて、個々の児童の実態に見合った個別のサポートプログラムを作成して、実践を積み重ねている。

2 「特別支援教室構想」に向けた学校の取組

(1) 交流及び共同学習の状況と課題

① 特別支援学級在籍の児童生徒の交流及び共同学習の推進方法

ア 基本的には「音楽」「体育」「図工」「家庭科」

「特別活動」を交流及び共同学習として行い、共に活動することから、歌や楽器の技能の向上や運動機能の向上、少人数では難しい活動（合唱・チーム競技）を通して、個別の教育課題のねらいを達成する。

イ 通常の学級での行事や校外学習で、集団活動や係活動を通して、経験を広げ社会性を培う。

ウ 特別支援学級担任の状況

・在籍児童が全員交流及び共同学習をしている場合は、支援が必要な児童の学級に入ったり、在籍児童の体育や家庭科等に付き添って、当該学級に在籍する個別の支援を必要とする児童の支援を行ったりする。

② 交流及び共同学習の個別の指導計画の位置づけ

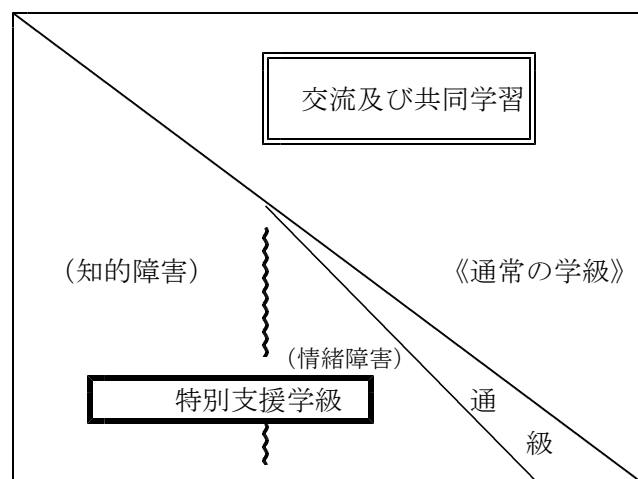
ア 交流及び共同学習の個別の指導計画を作成し、個々の児童の実態に応じて特別支援学級と通常学級での目標、内容、支援の方向等を明らかにして行う。 < 資料1 参照 >

イ 打ち合わせや連絡は、年度当初、年間の方向性を検討し、単元が変わるときや行事の計画を立案する時に検討を行う。

<資料1>

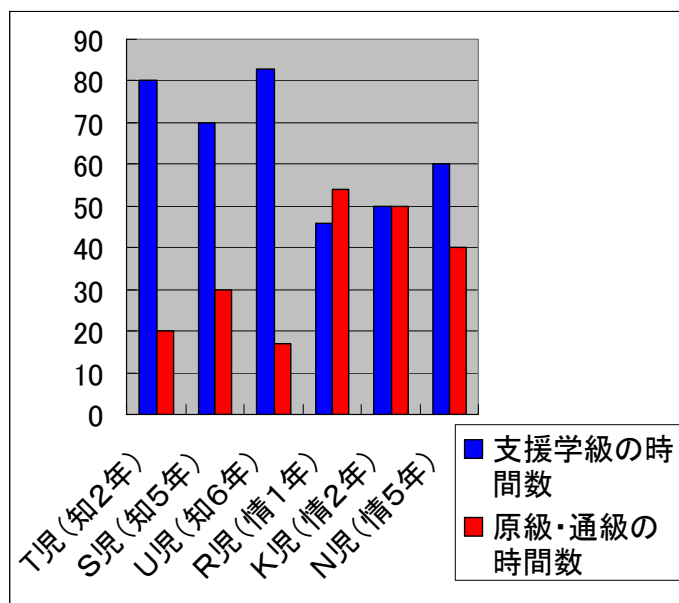
交流及び共同学習 個別の指導計画（短期）					
学級 年 組 氏名					
教育課題					
	特別支援学級	原級	通級	専科等	家庭
目標	*個々のねらいは何か。				
支援の方向	*ねらいを達成するための支援の手だては何か				
評価	*次への課題は何か				

エ 川中島小学校における「特別支援学級」「通級指導教室」「通常の学級」の関係



- 知的障害の児童と情緒障害の児童では、交流及び共同学習の時間数に違いがみられる。
- 知的障害の児童の場合は、障害に応じた教科指導や、障害に起因する困難の改善・克服のための指導の時間の多くを、特別支援学級で行っていることがわかる。
- 情緒障害の場合は、国語・算数を除く学習や生活面（給食・掃除等）については、大半の時間を原学級で行うことができる。
- 情緒障害の場合は、言語障害通級指導教室へ2名、学習障害等通級指導教室へ1名通級している。また、原級・通級の時間数が約半分を占めていることを考えると、障害に応じた教科指導や障害に起因する困難の改善・克服のための指導を必要な時間、情障学級と通級指導教室で行っていることが分かる。

ウ 交流及び共同学習の状況



- 知的障害の児童は、低学年から特別支援学級での時間が多い。
- 情緒障害の児童は、低学年から交流及び共同学習の時間が多い。
- 情緒障害の児童も学年が上がるにつれて、特別支援学級での時間が多くなる傾向がみられる。これは、原学級での教科学習面での理解や対人関係において、徐々に困難がみられるようになるためと考える。



オ 交流及び共同学習の実践例

- 特別支援学級の販売活動に、原学級（6年1組）が協力して販売品の製作や準備等を行い、保護者や先生方に販売を試みた。
- ねらい
 - ◇特別支援学級
 - ・分担された活動に意欲的に取り組み、多くの友だちと関わりながら楽しく活動ができる。
 - ◇原学級
 - ・自分の役割を果たし、積極的に特別支援学級の児童に関わりながら楽しく取り組むことを通し、友だちのがんばりや良さに気づくことができる。

c 活動内容

- ・販売品（松ボックリツリー・鉛筆立て・クリスマスのリース等）の製作や、ポスターづくりなどを各グループに分かれて、役割分担をして行う。

d 交流及び共同学習の効果

◇特別支援学級

- ・得意な製作を行うことでできることの喜びが実感できた。
- ・やるべきことがはっきりしていたので、見通しを持って取り組めた。
- ・交流及び共同学習の時、原学級の友だちに進んで関わろうとする行動がみられてきた。

◇原学級

- ・製作活動がやりやすいように気を配る姿がみられ、回を重ねるごとに親近感が生まれた。
- ・特別な支援を必要とする児童が、自分の役割を果たそうと、特別支援学級の児童に合わせた活動を行うことができた。
- ・普段は待つことや我慢が難しい児童が、相手を意識した行動や落ち着いた言動ができた。

- b 通常の学級（原学級）では、特別支援学級在籍児を学級の一員として位置づけ、仲間として受容し、相手を思いやる気持ちがないと、望ましい交流及び共同学習は難しい。

- c 個々の実態に応じた交流及び共同学習の内容の検討とより効果的なあり方の追究。

- d 個々の目標、支援の方向、評価の見直し。

（２）「特別支援学級」への担任以外を含めた共同的な指導の取組の状況と課題

- ① 音楽専科による「音楽」を中心とした指導を、二つの特別支援学級合同で週１時間実施

ア 季節や行事に合わせた歌唱指導、楽器を使用しているリズム学習や簡単な手遊び歌など。

- ② 打ち合わせや連絡

ア 年度当初、児童の実態に見合う学習内容を検討して計画し、定期的に見直しを行いながら、内容や個々の適切な支援のあり方について話し合っている。

- ③ 共同的な指導を実施している時の担任の状況

ア 一人は音楽の授業の補助的な役割で支援を行い、もう一人は、原級に入り込んでの支援を行ったり個別に取り出して支援を行ったりしている。

- ④ 成果

ア 少人数なので、一人ひとりの児童に支援の手が入りやすい。

イ 学習内容が個々の実態に見合っているので、全員が楽しく意欲的に取り組むことができる。

- ⑤ 課題

ア 週１時間では、児童との関係を形成するには難しい面がある。児童の実態に合わせた指導をしていくには、音楽にこだわらず多様な学習内容での指導が必要。

イ 児童は、多くの教師と触れあうことでコミュニケーションの力を培うことができるので、週１時間と限定せず、必要に応じて時間数を増やし学習内容を検討する必要がある。

カ 成果

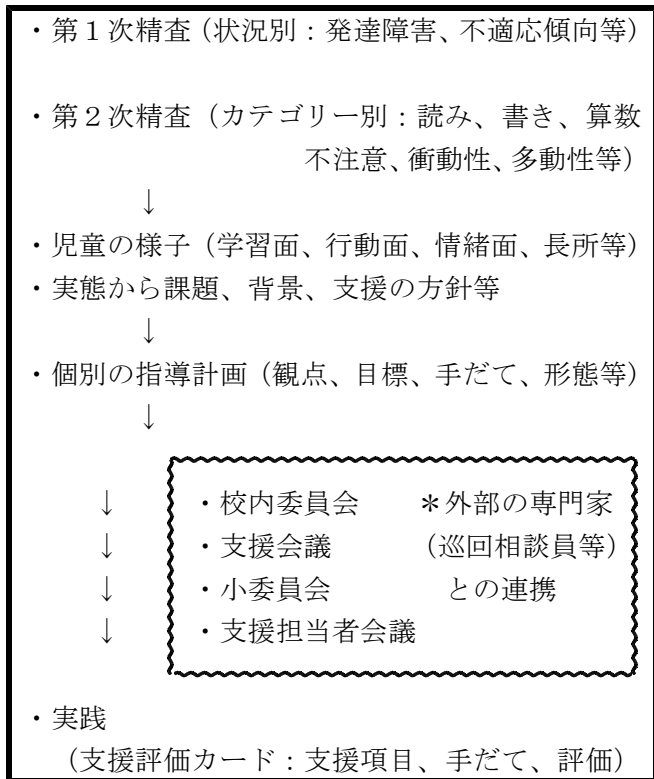
- a 個別の指導計画に基づいた交流及び共同学習によって、特別支援学級在籍児は、個々の願い（人とのコミュニケーション力の向上など）を原級との活動の中で、できることの喜びや仲間から認められることで満足感が得られ、場の状況を理解しながら自己の気持ちをコントロールする力が確かなものになってきた。
- b 通常の学級の児童は、相手を意識した行動や相手に合わせた活動を行うことで、相手を思いやる気持ちが培われてきた。

キ 課題

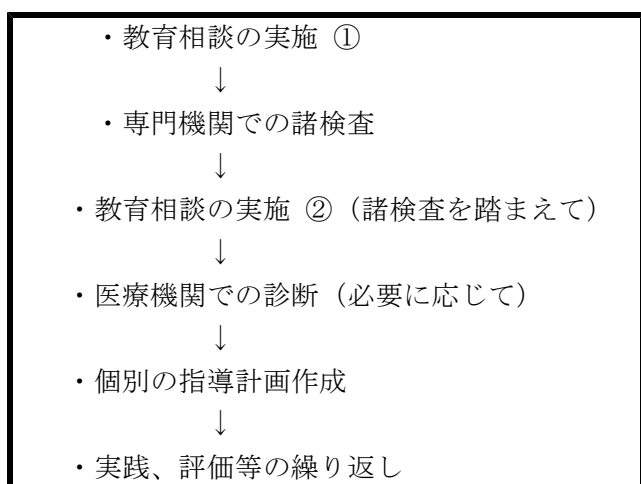
- a （１）②オの実践例 d より、特別支援学級と６年１組との交流学習（交流及び共同学習として考える）で、効果的な交流及び共同学習が成されたので、年間を通して継続的且つ計画的に行う。

(3)「特別支援学級」と「通級による指導」の弾力的運用についての状況と課題

① 支援の形態・内容と支援時間を決め出す手順 ア アセスメント



◇ アセスメントは、次のような教育相談を継続して行いながら、専門機関、医療機関との連携を行いながら進めていく。



② アセスメントから個の実態に応じた支援のあり方

◎ LD・ADHD等の疑いと発達の偏りがある
K児に 対する支援の事例 （小5男）

○第1次精査、第2次精査、児童の様子より
ア 学力的には、2学年程度の遅れあり。
イ 学年相応の文字の習得が困難。
ウ 数量関係や図形の概念等が困難。
エ 忘れ物が多く、整理整頓が苦手。
オ 思いつきですぐに喋り、場の空気をよみにくい。



◇背景

ア 発達の偏りがみられる。
イ 運動発達の遅れがみられる。
ウ 自閉的な傾向も疑われる。



◇課題

ア 文字が正しく書けて、計算が正しくできること
イ 運動能力の向上。
ウ 適切なコミュニケーション能力の向上。



◇支援の方針

ア 視知覚の弱さが学習に影響を及ぼしている
ので、視覚と運動の協応動作や空間における位置関係などのトレーニングを行う。
イ 鉄棒・縄跳び・マット運動・跳び箱等や、
ゲーム等も取り入れて、運動発達を促す。
ウ ソーシャルスキルトレーニング等を行う。



◇ 個別の指導計画（短期） 【算数領域】

ア 目標

- ・小数のかけ算や割り算の計算が正確にできる。
- ・小数点の位置や位の位置が正しく書ける。

イ 手だて

- ・マス目のノートの使い方を工夫。
- ・小数点の位置を強く意識できるような工夫。
- ・縦線、横線も使い方の工夫。

ウ 形態

- ・少人数指導において、学習障害等通級指導教室
担当と特別支援教育支援員が入り込み指導。



エ 支援評価カードの記録より

A：支援項目 B：手だて
C：評価 D：次の手だて

□ 第1段階

A：ノートのマスを意識して、問題を正しく写す。

B：ノートのどの場所を書くのか指示する。

C：不注意さがみられ、指示がないと間違えやすい。

D：マス目を赤でなぞり意識して行う。



□ 第2段階

A：割り算の筆算の順序を習得する。

B：「たてる、かける、ひくお君」で順序を覚える。

C：意識してできるがミスが多い。

D：補助計算部分に線を引き、分かりやすくする。



□ 第3段階

A：小数点の位置に注目して計算する。

B：計算の手順が書かれたプリントを写し書きする。

C：問題を写したとき位がそろい、小数点の位置も正しく書ける。

D：マス目の工夫。



□ 第4段階

A：位や小数点の位置に気をつけ、正しく計算する。

B：縦線のためのプリントで行う。

C：位の間違えが少なくなる。

D：プリントの問題数を減らし見やすくする。



③ 成果と課題

△ 位をそろえることや小数点の位置の間違えが減る。

△ 小数点の位置は、赤鉛筆で印をつけ意識付ける。

△ ノートのマス目を意識して数字を書くようになる。

△ 小数点のみを一マスに入れることはなくなる。

▲ 不注意さがあるので、簡単な繰り上がりや繰り下りの計算ミスがみられる。

▲ 板書の写し間違いがまだみられる。

▲ 数字の形が不揃いなので、見間違えて写している。

▲ 文字を正しく見極めて写すことが困難。

④ 「特別支援学級」「通級指導教室」「特別支援室」で取り出している個別の支援

ア LD の場合

・学習障害（読み書き等困難）の児童に対しての専門的な学習支援（週2時間・1名）

3年：1名



学習障害等
通級指導教室

イ コミュニケーション等の場合

・広汎性発達障害でコミュニケーションが苦手な児童へのSSTの支援（週1時間・1名）

1年：1名



学習障害等
通級指導教室

・構音障害があり、言語でのコミュニケーションが苦手な児童への支援（週1時間・5名）

1年：3名

2年：2名



言語障害
通級指導教室

ウ 一斉指導では無理な場合

・不登校による学習遅滞や学習の遅れが甚だしい児童への学習支援（週5時間・2名）

5年：1名

6年：1名



特別支援室



特別支援学級(情障)

・ADHDの疑いのある児童に対する作文等の学習支援（週2時間・2名）

6年：2名



特別支援学級(情障)

⑤ 「特別支援学級担任」「通級指導教室担当」「特別支援教育支援員」等が、特別な支援を必要とする児童の教室へ入り込んでの支援

ア 不注意さがある場合

・集中して取り組むことができるように、注意を促す支援等（週5時間・7名）

学習習慣形成担当



2年：7名

イ 発達の偏りがある場合

・LD・ADHD 疑いのある児童に対する読み書き算数困難への専門的な支援（週5時間・4名）

学習障害等

通級指導教室担当



5年：3名

3年：1名

- ・運動発達の遅れに対する体育等での補助的支援
(週 3 時間・1 名)

特別支援学級担任(情障) → 1 年 : 1 名

ウ 基礎学力の低下がある場合

- ・一斉での指導内容を、繰り返し指導するなどの補助的役割等を行う支援 (週 4 時間・5 名)
- ・リコーダ等楽器演奏への支援(週 2 時間・1 名)

特別支援教育支援員 → 3 年 : 3 名
3 年 : 1 名
4・6 年 : 2 名

⑥ 支援対象児童数と支援率の推移

ア 支援が必要な児童

(支援率 1 :

: 支援を実施した者 / 支援を必要とする者)

[7 月 : 1 8 / 4 9 約 3 7 %]

[10 月 : 2 3 / 5 0 約 4 6 %]

[12 月 : 2 8 / 5 4 約 5 2 %]

イ 支援時間の変化

(支援率 2 :

: 支援を実施した時間 / 支援を必要とする時間)

[7 月 : 1 8 / 4 9]

100 % - 4 人 80 % - 8 人

60 % - 0 人 50 % - 6 人

40 % - 0 人 0 % - 26 人

[10 月 : 2 3 / 5 0]

100 % - 6 人 80 % - 12 人

60 % - 0 人 50 % - 6 人

40 % - 0 人 0 % - 26 人

[12 月 : 2 8 / 5 4]

100 % - 10 人 80 % - 12 人

60 % - 0 人 50 % - 6 人

40 % - 0 人 0 % - 26 人

⑦ 成果

ア 通常の学級担任は、特別な支援を必要とする児童のアセスメントを、通級指導教室担当と一緒に作成し支援の手だてを検討することで、LD 等に対する支援のあり方を学ぶことができた。また、支援評価カードを作成して取り組んだことで適切な支援につながった。

イ 通常の学級担任は、一斉指導の中で気づくことのできない児童の反応を支援員等からの情報で理解することができ、次への支援の手だてを考

えるために役立てることができた。

⑧ 課題

ア 取り出している指導は、本人と保護者の理解がないと実現できない。そのために、教育相談を継続して行う必要がある。

イ 支援評価カードを基にしたミーティングは、常に行う必要がある。しかし、時間の確保・支援員の勤務時間の関係から厳しい面がある。保護者との連携も大切であるので、支援会議を定期的に行う必要がある。

ウ ⑥の支援対象児童数と支援率の推移から 1 2 月現在約半分の児童 (2 6 名) が、十分な支援を受けられない状況があるので教員及び支援員の加配が望まれる。

(4) 特別支援教育補助員 (支援員) の活用と専門性の確保についての状況と課題

①時間割

* 《 》 以外は算数 () 以外は入り込み

	月	火	水	木	金
1	打合会	3 年 M と T	5 年 (H)	4 年 K	3 年 S 《音楽》
2	3 年 M と T	6 年 N	3 年 M と T	5 年 (H)	5 年 (H)
3	4 年 K	3 年 S 《音楽》	6 年 N	6 年 N	6 年 N
4	5 年 (H)	5 年 (H)	4 年 (K)	3 年 M と T	3 年 M と T

②支援評価カード

児童名	男・女	年	担任名
支援者名 ()			
ア 短期目標 (期間 : 約 1 ヶ月間を目処)			
月/日	支援項目	手立て	評価
/	* この時間の支援内容を明確にする	* 担任と支援者 (LD 等通級指導教室担当・支援員) で具体的な内容を考える	* 次時への手立てを明記する

③ 打ち合わせの内容と1日の流れ

- ア 支援評価カードで具体的な支援内容を検討
- イ 入り込み、取り出しの支援後、担任と検討
- ウ 特別支援教育コーディネーターと、支援効果についてミーティング
- エ 担任と支援評価カードの見直しと、次への支援について検討

④ 支援評価カードの効果

- ア 児童の実態把握と支援の手立てが、わかりやすくなる。
- イ 支援の記録になるので、個別の指導計画の作成や評価に役立つ。
- ウ 支援の成果や課題等が把握できる。
- エ 担任・通級担当・支援員が支援評価カードを基にミーティングを重ねることで、発達障害に関わる専門性を培うことができる。

⑤ 課題

- ア 支援員の勤務時間の関係でミーティングの時間を確保することが難しい時がある。
- イ 専門的な研修の場をとりたいが、勤務時間の制約で十分にはできない。日頃の支援評価カードを基にしたミーティング等で研修を行っていく。
- ウ 児童によっては、下校まで支援が必要な場合があるので、支援時間の検討が必要。
- エ 教科指導の必要性がある場合は、免許の所持が望ましい。
- オ 支援員は、現在約10名の児童の支援を行っているが、⑥の支援対象児童数と支援率の推移から、12月現在26名の児童が十分な支援を受けていないので支援員の加配が望まれる。

3 3年間の取組から「特別支援教室」に向けての提言

- (1) 交流及び共同学習は、特別支援学級の実態（知的障害・情緒障害）によって時間数や場の違いがみられた。個々につけるべき力を明確にして行うためには、「交流及び共同学習の個別の指導計画」を作成し、特別支援学級や通常の学級の行事等においても計画的に行うことがより効果的な交流及び共同学習につながる。
- (2) 「特別支援学級」と「通級による指導」の弾力的運用については、支援の形態・内容と支援時間をきめ出していくためのアセスメントが大変重要に

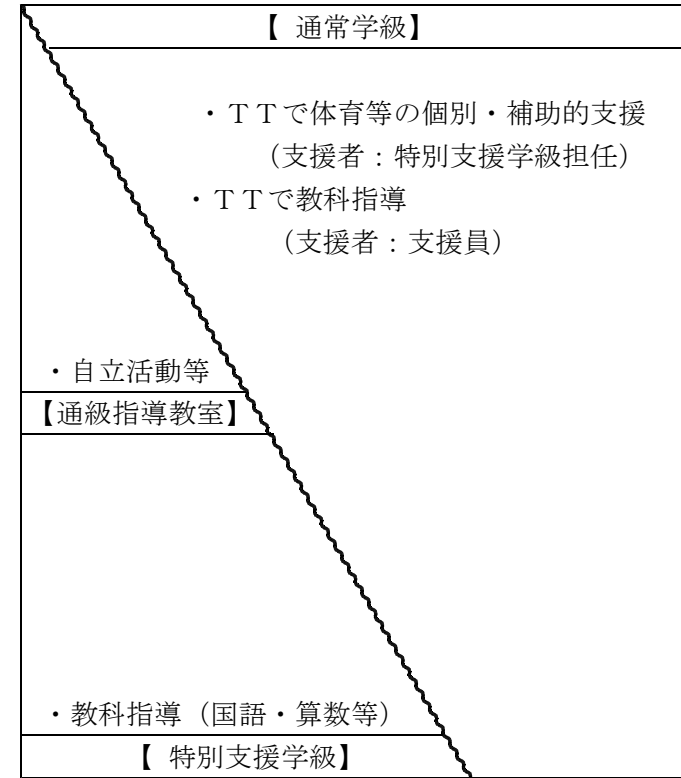
なる。通常学級に在籍するLD・ADHD・高機能自閉症等や発達の違い等のために学習面や対人関係の面などで困難を抱えている児童の実態に応じた支援を行うには、個に応じた支援内容が何なのか、特別な場で適切な指導及び必要な支援を受ける場合、取り出しての支援か、入り込んでの支援か、(7)「イメージ図ー1」のような「通級による指導」と「入り込み指導」になるのか、また、(7)「イメージ図ー2」のような「通級による指導」になるのか、どちらがより有効なのかを十分検討しながら行う。

- (3) 通常の学級担任の支援力の向上については、特別な支援を必要とする児童のアセスメントから、一人一人の教師は学ぶ必要がある。個別の指導計画作成にあたっては、特別支援教育コーディネーターの指導・支援のもと、外部の専門家等の支援や校内外の研修会や事例研究会等を積み重ねながら行うことが有効。
- (4) 支援員の効果的な活用を行うためには、児童の実態に応じた支援が必要になる。例えば、学習に集中して取り組めるように注意を促す支援、運動発達の遅れがある児童の体育等での補助的支援、リコーダーの演奏がスムーズにできるような支援等実に様々な内容がある。それらについて、支援評価カードで具体的な支援内容を明らかにして取り組むことで支援の効果がみられる。また、(3)⑥⑧(4)⑤より教員及び支援員の加配が望まれる。本校の場合は、(7)「イメージ図ー1」「イメージ図ー2」から考えると、教員・支援員共に1～2名の加配が必要。
- (5) 支援員の専門性の確保については、支援評価カードを基に支援項目や手だてを明確にして支援にあたり、特別支援教育コーディネーターとのミーティングや担任と支援に関わる学習障害等通級指導教室担当等とのミーティングに参加し研修を積み重ねていくこと。そのような場を工夫し設定して行っていくことが支援員の専門性の確保につながる。
- (6) 「特別支援教室構想」に向けた取り組みをする中でみてきたことは、「通級による指導」の形態を多様化し、特別な支援を必要とする児童に対する支援を、全職員一丸となつての校内支援体制を構築することの重要性である。そのためには、管理職以下、全職員が特別支援教育に対する正しい理解と認識を高めながら学校全体として取り組んでいくことが必要。

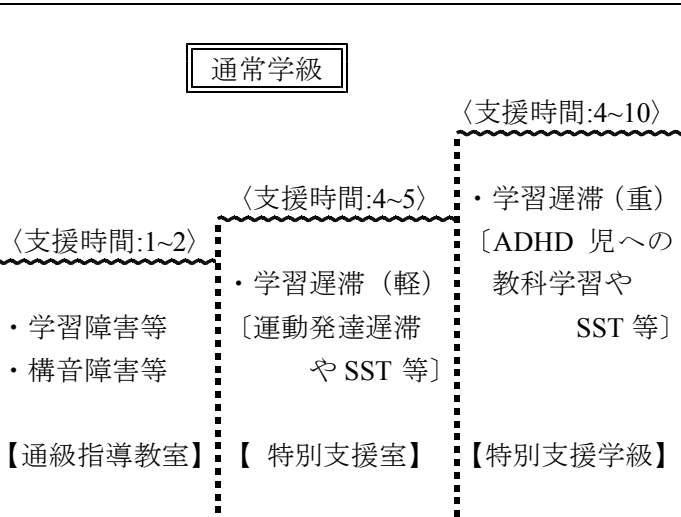
(7) 「特別支援教室（仮称）」の具体的なあり方
 本校は、特別支援学級（知的障害・情緒障害）、
 通級指導教室（言語障害・発達障害）の二本立て
 で行っているが、これを、学校の裁量を拡大し「特
 別支援教室」の形態で柔軟な指導を行った結果が
 以下ようになる。

(例) Aさんの現状より

＊イメージ図ー1
 《「通級による指導」と「入り込み指導」を行う場合》



＊イメージ図ー2
 《「通級による指導」を行う場合》



通常の学級に在籍した上で、障害に応じた教科指導
 や障害に起因する困難の改善・克服のための指導を
 必要な時間のみ特別な場で教育や指導を行う形態
 「特別支援教室」（仮称）への移行段階としては、
 特別支援学級（情緒障害）が「通級による指導」の
 形態であったり、通級指導教室の受け皿が用意され
 ていたり、支援員等のサポートが受けられる状況や
 環境が整っていることが望ましい。「特別支援教室」
 （仮称）は、基本的には通常の学級に在籍して必要な
 時間だけ特別のニーズに対応した指導を受けるとい
 うシステムなので、上記の様な受け入れられる場や
 サポートする人がいて成り立つ。「イメージ図ー1」
 や「イメージ図ー2」等を参考にしながら検討して
 いく必要がある。